

ユダヤ系アメリカ人の欺瞞——“Eli, the Fanatic”

鈴木 久 博

I. Introduction

Philip Roth (1933-) はユダヤ性に反逆した作家であると評されてきた。実際、彼が書いたものは同胞ユダヤ人たちの怒りを買ひ、激しく攻撃もされた。しかし、Rothはユダヤ的なものであれば何でも否定し、攻撃したのだろうか。そうではない。では、彼はユダヤ人の中のどんな部分を攻撃したのだと考えられるだろうか。それは偽りではなかったか。

本論では、Rothの処女作品集である*Goodbye, Columbus*に収められている短編“Eli, the Fanatic”を中心に論じる。この短編では、ユダヤ人のアメリカ社会への同化という問題が非常に直接的に扱われている。この作品を分析することによって、ユダヤ人のアメリカへの同化に伴う欺瞞・矛盾といった問題を明らかにしてゆこうと思う。なおその際、Rothと同時代のユダヤ系作家であるBernard Malamud (1914-1986) の手による短編“The Jewbird”も参照してゆく。また最後に、Rothの作品集のタイトルになっている中編小説“Goodbye, Columbus”にも、参考までに触れておきたい。

II. “Eli, the Fanatic”

この短編の大きなテーマはユダヤ人のアメリカ社会への同化とアイデンティティの問題である。舞台はニューヨーク近郊のWoodentonという町である。この町には多くのユダヤ人たちが住んでいるが、彼らはWoodentonの町を“a modern community” (187) と呼ぶ、アメリカ社会に同化した者たちである。この物語の主人公であるEli Peckもそうしたユダヤ人のひとりとして登場する。

彼らが平穏に暮らしているところに、ある日、ドイツからのユダヤ難民であるLeo Tzurefと名乗る男と、正統派ユダヤ人が着る黒尽くめの身なりをした男、それに18人の子供たちが現れる。Tzurefはユダヤ神学校 (Yeshivah) を開設し、そこで子供たちを教育し始めるのである。すると町の先住ユダヤ人たちは、黒尽くめの服装と、神学校に激しく反対し始める。彼らは弁護士であるEliに言って、Tzurefを説得して男の黒尽くめの格好を止めさせたり、

Tzurefが神学校で教えることを厳しく制限させようと必死になる。言い換えれば、彼らはユダヤ的なものがWoodentonに入ってくるのを阻止しようとするのである。ここに、彼ら自身ユダヤ人でありながら、ユダヤ的なものを否定し、ユダヤ人としてのアイデンティティを忘れようとする姿が見られる。彼らはユダヤ的なものがWoodentonに溢れることに恐怖さえ抱く：“‘Eli,’ Harry Shaw again, ‘It’s not funny. Someday, Eli, it’s going to be a hundred little kids with little *yamalkahs* chanting their Hebrew lessons on Coach House Road, and then it’s not going to strike you funny’” (192).

一言で言えば、“Eli, the Fanatic”は、これらの町のユダヤ人たちの要請を受けたEliが、Tzurefと交渉をしてゆく物語であるが、自分たちがどれほどの苦難を受け、困窮状態にあるかを知っているTzurefは、そう簡単に折れるはずもない。事実、黒い服はそれを着ている男が持っている唯一の服であるし、神学校として使っている建物には電燈さえもない状態である。Eliは法律を楯にTzurefに町の人々の要求を伝えるのだが、Tzurefの方は“What you call law, I call shame. The heart, Mr. Peck, the heart is law! God!” (198) と言って、貧しい自分たちに様々な要求をつきつけるEliたちを非難するのである。

もともと弁護士でありながら法に対して懐疑的なところのあるEliは、Tzurefに法の無意味さを指摘されると、心が揺らぎ始める。そして徐々に態度を変え始める。彼は男の服を黒尽くめのものではない、普通のものに変えさせるために、自らの気に入っているBrooks Brothersのスーツをその他の衣類一式と共にあげてしまう。そして、彼はその代わりとして、黒尽くめの服をもらうことになる。箱の中に入ったその服を見ているうちに、今度はEliの方がそれを着て、男に会いに町に出てゆく。それだけでなくEliは、その服を着ているのが自分だということを隠すことができない：

Eli felt suddenly that if he could pull the black hat down over his eyes, over his chest and belly and legs, if he could shut out all light, then a moment later he would be home in bed. But the hat wouldn't go past his forehead. He couldn't kid himself—he was there. No one he could think of had forced him to do this. (214)

このことは非常に重要な意味を持っている。Eliはそれまで町のユダヤ人たちの要請により、Tzurefたちに対してユダヤ性を露にしないように働きかけていた。しかし、実は彼自身外面的にはそのようにしながら、本質的にはユダヤ人であり、それを偽ることができなかったということを、この出来事は意味しているのである。それは心の問題なのであり、Tzurefの言葉によってEliの中に、貧しく、そして苦難を受けてきた同胞に対する思いやりの心が啓発されたのである。Eliは、彼らに対して哀れみを感じ、自らも思いを共にする者であることを示すためにこのように行動したのであった。彼は、そのようにすることが、弁護士としてというよりも人間として、同胞ユダヤ人に対すべき姿であることを悟ったのである。

従って、彼は黒尽くめの身なりをしていた男によって、その服を着たままWoodentonの町へ行くように指示されても、何ら躊躇することなく、町を歩き回り始めるのである。彼はまた、町の人たちに“Sholom”とイディッシュ語で挨拶をする。彼に気付いた町の人たちが彼の名前を呼ぶのだが、その時もEliは、黒い服を着ているのが自分であることが町の人たちにわかって、狼狽するようなことは全くない：

Heavily he trod, and as his neighbors uttered each syllable of his name, he felt each syllable shaking all his bones. He knew who he was down to his marrow—they were telling him. Eli Peck. He wanted them to say it a thousand times, a million times, he would walk forever in that blacksuit,... (216)

このようなEliは、アメリカ社会に同化しきってしまい、自らのルーツを否定しようとする町の者たちには、ただ気が狂った者としてしか映らない。しかし、ユダヤ人として生きるべき姿が、正にそのアイデンティティを肯定することにあることを発見したEliにとっては、自分のしていることは全く理に適ったことなのである。そのようにすることによってEliは、Woodentonの人たちにユダヤ性に立ち返るよう訴えているとも言えよう。そうであるから彼は、生まれたばかりの息子を見に病院に行くのも黒尽くめの格好で行くのであるし、その服を将来子供にも着させようとするのである。最後に皆が力づくでEliの黒い服を脱がせ、鎮静剤を打つのだが、それとて彼が人間としての本質であると悟ったユダヤ性を否定することはできない：“In a moment they tore off his jacket—it gave so easily, in one yank. Then

a needle slid under his skin. The drug calmed his soul, but did not touch it down where the blackness had reached" (221). 町の人たちがEliの黒い服を脱がせたということは、象徴的にEliにユダヤ性を捨てさせ、アメリカ社会に同化してきたそれまでのEliの姿に戻らせようとしたということの意味する。しかし、所詮それは無理であった。なぜなら、ユダヤ性こそ自らの本質であることを、Eliは悟ったからである。そのことをRothは"The drug...did not touch it down where the blackness had reached"という表現で表している。

Eliは弁護士という社会的に認められた立場にあり、町の者たちを代表していると言える。そのEliの本質はユダヤ性にあったのだが、彼は自分を偽って弁護士という職に奉じて、Tzurefに町の人々の要求を呑ませようと、非人道的なことをしようとしていたのであった。さて、彼と同様に、町の他の人々ひとりひとりも、アメリカ人になりすますことによってユダヤ人であるという自らのルーツを偽っていると考えられはしないだろうか。

ところで、町の人々の、黒尽くめの格好をした男に対する非難は極めて激しい。これは何故であろうか。アメリカにおける先住ユダヤ人と、後に移民してくるユダヤ人との関係について、次のLeo Rostenのコメントが参考になるであろう：

To the prosperous, Americanized, bourgeois German Jews, the new immigrants—poor, gaunt, bearded, ear-locked, black-hatted, dressed in long black caftans—looked like ‘mediaeval apparitions.’ To the *Deutsche Yehudim* (German Jews), the new Ashkenazim were religious fanatics or—doubly puzzling—‘agitators,’ union organizers, socialists, radicals. (Rosten 472)

ここに述べられているように、Woodentonの町の先住ユダヤ人たちにとってはTzurefの、そして物語の最後のEliの黒尽くめの姿は、まさに、“fanatic”の姿であったのである。実際、この物語の題名も“Eli, the fanatic”となっている。

更にもう一段階掘り下げて、何故先住ユダヤ人たちが、後にやってくるユダヤ人たちを嫌ったのかについて考えてみたい。ここで、Malamudの短編“The Jewbird”を参考にしてみようと思う。この短編は、アメリカ社会に同

化したユダヤ人冷凍食品業者Harry CohenのアパートにSchwartzという名の“Jewbird”が舞い込むところから始まる。Schwartzはとても飢えているのだが、Cohenはそのような“同胞”の訴えを断固として聞こうとはしない。彼はアメリカに同化するため、自らのルーツであるユダヤ性を忘れ去ろうとしてきた。神との関係を断ち切り、同胞の苦難に対して目を、耳を閉ざし、アメリカ人になりきろうとしてきた。Cohenはいわば良心を麻痺させてきたのだが、今それをSchwartzが思い出させるのであり、彼は心の中で、ユダヤ性を捨てたことに対する良心の呵責を覚えざるを得ない。彼にとっては、Schwartzは思い出したくないことを思い出させるのである。Cohenが“同胞”を救うどころか、激しく迫害し、Schwartzが彼のアパートに留まることに強固に反対するのは、このような理由によると考えることができるのである。Cohenのこの精神構造については、Robert Solotaroffが次のように述べている通りである：

Racism in large part follows from the projection onto others of qualities that secretly frighten or shame the racist, and Schwartz does embody to Cohen the Jewish origins that he would like to expunge. (Solotaroff 79)

実際の歴史を見ても、神との関係を断ち切り、良心を麻痺させてアメリカ社会に同化しようとしてきたユダヤ難民が多いことに気付く。神の選民であることを自負していたユダヤ人たちは、聖書やTalmudを熱心に勉強するとともに、ユダヤ教の戒律を守ることを極めて重視していた。しかし、アメリカでは、そのような自分たちが大切にしてきた精神的遺産を捨て、金稼ぎに精を出さなければ、パンを買う金もなく、明日の生活もままならなかった。従って、彼らは「ともすれば生存競争に自己を見失い、学問や宗教を無意識のうちに遠ざけて、目の前の利益に汲々として生きようになる」(浜野 44)のであった。病ましさを感じながら、生きるためには神や聖書を二の次にしていった。

Woodentonの町のユダヤ人たちにとって、Tzurefや黒尽くめの男たちは、まさにこのことを思い出させる存在であった。彼らはNaziの生き残りの難民であり、また同様の子供たちを連れている。貧しいながらも家を買ひ、そこを寄宿舎と共に、神学校としても用いている。つまりWoodentonのユダヤ人から見れば、Tzurefたちは同胞の苦しみと神への帰依の重要性を痛烈に

訴える者だったのであり、彼らの存在によって、町のユダヤ人たちは無意識のうちにも良心が痛んだのではないだろうか。だからこそTzurefたちがユダヤ性を露にするのを必死で阻止しようとしたのではなかったか。

ところで、Woodentonの人々のTzurefたちに対する態度には、いまひとつの理由が考えられる。Josephine Z. Knoppが次のように指摘している通りである：“his [Eli's] fellow Jews... [felt] embarrassment and fear of becoming identified with the newcomers in the eyes of the Protestant community” (Knopp 104)。彼らにとっては、いかにアメリカ社会に同化するかが最優先課題なのであり、そのためにはユダヤ人であると見なされては絶対に困るわけなのである。彼らは、自らのアイデンティティを偽ることも辞さないし、更にはユダヤ民族の迫害史と関連して、これを正当化する理由も持っている。かつて、Tzurefのところへ行く途中でEliは次のように思う：

“Here, after all, were peace and safety—what civilization had been working toward for centuries.... It was what his parents had asked for in the Bronx, and his grandparents in Poland, and theirs in Russia or Austria, or wherever else they'd fled to or from.... And now they had it—the world was at last a place for families, even for Jewish families. After all these centuries, maybe there just had to be this communal toughness—or numbness—to protect such a blessing.” (208)

このように、アメリカ社会に同化しようとするならば、ユダヤ人たちは自らの良心を麻痺させて生きてゆかざるを得ないということになる。換言すれば、彼らは必然的に自らのアイデンティティを偽らざるを得ない状況に置かれていると言えるだろう。

以上のように考えてみると、Rothが非難しているのはユダヤ性そのものではない。それどころか、ユダヤ性自体は肯定している。問題なのは、アメリカ社会に同化しようとすることによって、本来のユダヤ人としてのアイデンティティを偽っているユダヤ人たちなのである。つまり、Rothが否定しているのは、JudaismではなくJewish life in Americaなのであり (Knopp 109)、その理由は、Marie Syrkinの言葉を借りれば“not because it is too Jewish, but because it is not Jewish enough, because it is so dominated by and infused with the American ethos that it partakes of the same

corruption...” (qtd. in Knopp 109) ということなのである。

さて、このSyrkinの言葉の中にアメリカ社会の“corruption”という表現があるが、これを正面から取り上げたのが、作品集*Goodbye, Columbus*のタイトルになっている中編小説である。この作品は一部の批評家には、Rothがユダヤ性を非難している作品であると捉えられているが、私見によればそうではない。そのあたりも含め、この作品に触れておきたいと思う。

Ⅲ. “Goodbye, Columbus”

この作品の主人公Neil Klugmanは、Brenda Patimkinと恋におちるが、Patimkin家の人々はまさに、アメリカ社会に同化しきった裕福なユダヤ人である。かつては貧しいNewarkのユダヤ人街に住みながら、現在では高級住宅地Short Hillsに居を構え、長女Brendaを名門女子大学Radcliffeに送っている彼らは、Woodentonのユダヤ人たちよりも更にアメリカ社会に同化していると言えるかもしれない。彼らはあまりにも富に価値を置き過ぎているために、人間的には全く卑しい者になっている。

さて、NeilとBrendaは互いに恋におち、肉体関係を結ぶまでになる。しかし、この小説のクライマックスにおいて、そのことがPatimkin夫妻に知られてしまう。その時、Brendaは両親を裏切れないといい、結果としてNeilを捨てる道を選ぶことになる。これは一見すると、Brendaがユダヤ民族の持っている家族の絆の強さの故にNeilを捨てているように思えるのだが、実はそうではない。彼女の理由は、純粹に両親を大切にすることというよりもアメリカ的価値観に基づいた理由である。彼女がNeilに言う言葉をよく分析してみよう：

‘Neil, you don’t understand. They’re still my parents. They did send me to the best schools, didn’t they? They have given me everything I’ve wanted, haven’t they?’ (102)

これは、Brendaが両親によって体現される物質主義を重視している現れでなくて何であろうか。彼女は、自分自身の中に染み込んだ物質崇拜と自らの裕福さの故に、貧しく、地位もないNeilに対して精神的優位に立ち、彼との交際を心のどこかで軽く見ていたのではないだろうか。彼女は自分では気付いていなかったのかもしれない。しかし、Neilはそれを敏感に感じていたに違いない。BrendaはNeilに対して“You kept acting as if I was going

to run away from you every minute" (103) と言っているが、Neilにはそのように感じられたとしても無理なからぬことであっただろう。Irving Howeは物質的豊かさに裏打ちされたBrendaの精神的優位性について、次のように述べている：

Brenda's sense of social place enables her, somewhat like Daisy Buchanan in *The Great Gatsby*, to come through unscathed from the break-up of the affair, for it is this sense of social place—of money, family, security—which permits her to take emotional risks without quite knowing that they are risks.
(Howe, *Celebrations and Attacks* 36)

このようにBrendaは、人間としての純粋な感情を失ってしまっているのだが、これも究極的には、アメリカ社会に同化することによってもたらされた弊害であると言えるだろう。そうであるから、二人が破局を迎える根本的な理由は、Brendaの物質崇拜にあると言えるのではないだろうか。確かにBrendaは、Neilよりも両親を優先するのだが、それは彼女の両親が自分が望むものを与えてくれたからに他ならない。もしも、彼女の親がPatimkin氏の異母兄弟であるLeoの様に社会的な失敗者であったなら、BrendaはNeilを捨てて両親を優先していたか疑問である。繰り返して言うと、ここで問題となっているのは家族を重視するというユダヤ的価値観ではないのである。

物質偏重の腐敗したアメリカ社会への同化によって人間性が失われている例を、今度はMr. Patimkinの会社（台所・浴室用流し製作会社）から見てみよう。そこではBrendaの兄Ronも働いているのだが、そこはまさに儲け主義に徹している。そこを訪れたNeilは、儲けることしか頭にない彼らの無神経な仕事ぶりを目のあたりにして、嫌悪感を覚え、自分には到底動まらな
と感じる：

Six Negroes were loading one of the trucks feverishly, tossing—my stomach dropped—sink bowls at one another.

Ron left Mr. Patimkin's side and went back to directing the men. He thrashed his arms about a good deal, and...he didn't appear to be at all concerned about anybody dropping the sink. Suddenly I could see myself directing the Negroes—I

would have an ulcer in an hour. I could almost hear the enamel surfaces shattering on the floor. (73)

Neilはユダヤ的世界に不自由さを感じてはいたけれども、人間性を棄ててまでアメリカ社会が象徴する富や名声を得ようとすることはできない。この意味で彼はアメリカ社会に同化してはいない。彼の勤めている図書館に、Gauguinの絵を見るために、ユダヤ人街であるNewarkからやってくる黒人少年がいるが、Sanford Pinskerはこの黒人少年の姿がPatimkin家におけるNeil自身の姿であると指摘する：

Neil finds himself protecting both the boy and the expensive reproductions from unworthy adults who might check the volume out. The shy boy thus serves as a point of reference when the garish world of the Patimkins threatens to become unbearable. Moreover, his alternating bravado and uneasiness at the library are a mirror image of Klugman's own behavior in the alien, suburban world of Short Hills. (Pinsker 84)

結局、NeilはShort Hillsに住むBrendaに恋をするけれども、彼自身が“I felt a deep knowledge of Newark, an attachment so rooted that it could not help but branch into affection” (30) と感じている通り、彼のルーツはNewarkにあるのであり、それを断ち切ることはできないのであった。このようなNeilの姿を通して、物質主義が横行するアメリカ社会の腐敗と、そのような社会に同化し、自らのアイデンティティを偽っているPatimkin家の人物たちの人間性の喪失が明瞭に浮かび上がってくるのである。

IV. Conclusion

Rothの処女作品集から“Eli, the Fanatic”と“Goodbye, Columbus”を取りあげて論じてきたが、本論で述べたように、Rothはユダヤ性自体を否定しているのではない。Rothが批判しているのは、“Eli, the Fanatic”に見られるように、アメリカ社会への同化という問題と絡んで、ユダヤ人が自己を偽るようになることなのである。また、そのようにしてアメリカ社会に同化した者が、どれほど人間的に卑しく、身勝手なものとなっているかを、彼は“Goodbye, Columbus”において描き出しているのである。

Rothの他の作品、例えば、*Goodbye, Columbus*の中に収められている“*The Conversion of the Jews*”や、*Portnoy's Complaint*などを見ると、確かにRothはユダヤ性を批判しているように見える。しかし、そのような作品に於いてもRothが非難しているのは、盲目的にユダヤ人であれば善であり、異教徒であれば悪であると決めつけ、本来の人間性に目を閉ざしてしまう態度なのであり、純粹にユダヤ性それ自体を非難しているのではない。その意味でRothの態度は一貫したものであると言えよう。

註

- 1 Eliが元来法に対して懐疑的な様子については、次のように記述されている：
Too often he wished he were pleading for the other side.... The trouble was that sometimes the law didn't seem to be the answer, law didn't seem to have anything to do with what was aggravating everybody. And that, of course, made him feel foolish and unnecessary.... (190)

引用文献

- Fitzgerald, F. Scott. *The Great Gatsby*. Harmondsworth: Middlesex, Penguin Books, 1950.
- Girgus, Sam B. *The New Covenant: Jewish Writers and the American Idea*. Chapel Hill and London: University of North Carolina Press, 1984.
- Guttman, Allen. *The Jewish Writer in America: Assimilation and the Crisis of Identity*. New York: Oxford University Press, 1971. Rpt. in *Philip Roth*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House Publishers, 1986: 53-62.
- 浜野成生. 『ユダヤ系アメリカ文学の出発』. 研究社, 1984.
- Howe, Irving. *Celebrations and Attacks: Thirty Years of Literary & Cultural Commentary*. New York and London: Harcourt Brace Jovanovich, 1980.
- . "Philip Roth Reconsidered." *Commentary* Dec. 1972. Rpt. in *Philip Roth*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House Publishers, 1986: 71-88.

- 今村楯夫. 「境界の奇妙な戦い」『ユダヤ系アメリカ短編の時空』. 日本マラマッド協会編. 北星堂書店, 1997.
- 岩元 巖. 『現代のアメリカ小説—対立と模索』. 英潮社, 1974.
- Knopp, Josephine Z. *The Trial of Judaism in Contemporary Jewish Writing*. Urbana: University of Illinois Press, 1975.
- Malamud, Bernard. "The Jewbird." *Idiots First*. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1963.
- 宮本陽吉. 「Jewish Americanの矛盾」『英語青年』1 Mar. 1972: 4-5.
- Pinsker, Sanford. *Jewish American Fiction 1917-1987*. New York: Twayne Publishers, 1992.
- Rosten, Leo. *The Joys of Yiddish*. Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 1971.
- Roth, Philip. *Goodbye, Columbus*. Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 1986.
- . *Portnoy's Complaint*. Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 1986.
- . "Writing American Fiction." *Reading Myself and Others*. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1975.
- Solotaroff, Robert. *Bernard Malamud: A Study of the Short Fiction*. Boston: Twayne Publishers, 1989.
- ワース, ルイス. 『ユダヤ人問題の原型・ゲッター』今野敏彦訳. 明石書店, 1993.